国木田独歩 ── 方法としての「小民」

大　坪　利　彦

一．国木田独歩の可能性

国木田独歩（1871－1908）が近代の小説家のなかで、先験的な才能を示した作家として、小説の思想性・主題性においても、また小説文体のうえにおいてもきわめて大きな影響力をもった作家の一人であることは周知のことと思われる。独歩をして、何がそのように近代小説を可能にさせたのか。あたかも樋口一葉の「奇蹟の十四箇月」[1] と呼ばれるような凝集した〈時間〉におけるインスパイア状況のみられるようにである。独歩は主として小説を書くようになる以前に、教師や新聞記者の経験をもっていた。たとえば新聞記者時代の独歩の文章としては、日清戦争時における「海軍従軍記」である「愛弟通信」（『國民新聞』明治27年10月24日－明治28年３月12日）などがよく知られているわけだが、愛弟（国木田収二）に向かって〈語る〉というその文章のモダリティについて、その後の小説においても同様の〈語り〉の構造をもっている作品の多いことが指摘されている。[2] そこで小説については、独歩の最初期の「たき火」（『國民之友』、明治29年11月）「源おぢ」（『國民之友』、明治30年５月）「武蔵野」（『國民之友』、明治31年１月・２月）「忘れえぬ人々」（『國民之友』、明治31年４月）「死」（『國民之友』、明治31年６月）「河霧」（『國民之友』、明治31年８月）など第１文集『武蔵野』（明治34年３月、民友社刊）に収録された作品から、「牛肉と馬鈴薯」（『小天地』、明治34年11月）「巡査」（『小柴舟』、明治35年２月）「富岡先生」（『教育界』、明治35年７月）「少年の悲哀」（『小天地』、明治35年８月）「空知川の岸辺」（『青年界』、明治35年11・12月）「酒中日記」（『文藝界』、明治35年11月）「非凡なる凡人」（『中学世界』、明治36年３月）「運命論者」（『山比古』、明治36年３月）「春の鳥」（『女学世界』、明治37年３月）など第２文集『独歩集』（明治38年７月、近事画報社刊）および第３文集『運命』（明治39年３月、佐久良書房刊）に収録された多作の中期を経て、「號外」（『新古文林』、明治39年８月）「疲労」（『趣味』、明治40年６月）「窮死」（『文藝倶楽部』、明治40年６月）「渚」（『文章世界』、明治40年12月）「竹の木戸」（『中央公論』、明治41年１月）「二老人」（『文章世界』、明治41年１月）等の晩年期の作品までを網羅的に論じることは無理としても、独歩の作家的生涯をある程度全体的な視野のなかに収めながら、ステレオタイプな方法ではあるが、「欺かざるの記」（明治26年２月３日－30年５月18日）にみられるパーソナルな記述を参照しながら考察検討してみたいと考えている。要するに、従来の独歩研究におけるオーソドックスな論点についての再検討を行うことを、全体としては意図していることになるわけだが、そのなかから、第一に「小民および小民史」という中心主題のクローズアップの問題、次に小説における「語り」の構造の問題、さらに近代国民国家として閉塞感を強めた政治的・社会的制度に対する独歩の文学的立場を明らかにしながら、その地平に立ち竦むだけの存在ではない現実社会へのコミットのあり方の問題など多岐にわたっているわけだが、そ

うした複合的な統合主体としての国木田独歩像を、日清・日露の戦間期および日露戦後期におけるナショナリズムとの関係において検討していくという論点が、この小論の課題であり、不十分ではあるが考察を予定している問題点にほかならない。また、独歩はこれらの初期の作品にして、かつ代表作でもある小説群を、主に『國民之友』およびその周辺に位置づけられる雑誌、たとえば『家庭雑誌』など民友社系の出版物・刊行物に寄稿しながら、その間27歳から30歳にかけて思想的にも文学的志向性においてもほぼ成熟へと向かっていったとみることが一般的評価のようであるわけだが、その独歩の小説家としての軌跡は、夏目漱石と同様におよそ10年間に過ぎないものであったことは注意しておく必要がある。

二. 小説の「国民」── 自然主義と国民国家

中村青史氏の指摘に「"第二の維新"を託された世代に、国木田独歩は生きた。当時の一般的社会風潮であった政治家への野望を、彼も強く持っていたと考えられる。明治二〇年に上京し、その翌年には民友社に近づいた。民友社の第二軍的存在の青年協会に入会したのである。」[3] とあることから分かるように、明治19年6月に父専八の裁判所職員非職という不運を被って山口中学校を退学することとなり、明治期の学制におけるエリート教育からドロップ・アウトしてしまい、傍流の学校教育機関へと移ることとなってしまったことの独歩に与えたその後の影響は大きいものがあると思われる。[4] この転機に臨んで明治20年4月、独歩は17歳で上京するわけだが、京橋区岡崎町に下宿して、神田の法律学校に通うようになる。翌21年3月には中村氏の記述にあるように、民友社の下部組織である青年協会の会報誌『青年思海』第8号に「群書ニ渉レ」を寄稿するようになるほどの接近を果たしている。民友社は、明治20年2月に熊本の大江義塾を母体として、徳富蘇峰が設立した言論・出版事業を推進するための団体であった。中村氏の「民友社の文学とは、端的に言えば『国民之友』『国民新聞』を中心とした民友社出版の雑誌・新聞に拠った文学を言う。なかでも一八八七年二月の『国民之友』創刊より一八九八年八月同誌廃刊の時期までに、文学史上に位置づける民友社の文学はあると考えられる。」「そこに渦巻く熱気の中心は徳富蘇峰であり、彼の影響を多かれ少なかれ被った作家や作品を、民友社の文学者あるいは民友社派の作品と言うことができよう。」[5] という概括に民友社の本質が端的に捉えられていると思われる。また、和田守氏は「一八八七（明治二〇）年、『第二の明六社』とも称せられる民友社が平民主義を掲げて設立された。」「文明社会の自由・平等・平和的性格を力説し、武備主義から生産主義への転換を主張した平民主義の鮮烈なアピールと『政治社会経済及文学之評論』と銘打った総合雑誌の斬新な編集によって『国民之友』は大変な好評を博し、発行部数も一千部も出れば上々といわれた出版状況下で創刊号七千五百部、一年後には一万部を超える破格の売れ行きで、とくに文学附録号は二～三万部を発行したほどであったとのことである。」[6] と述べているように、蘇峰はアメリカの雑誌に倣って、誌名も意識的な『国民之友』という「政治社会経済及文学之評論」という広範囲にわたる総合雑誌を創刊して、その時代に適合した編集方針について、和田氏は「明治初年の明六社の啓蒙精神を継承した思想・文学ならびに言論集団へと成長して」、同時に確実に『明六雑誌』以後の新しい言論界の様相を捉えることに利した手腕を、その地方書生とも言い得るような青年たちの客気と行動力とに重きをみている。「このように民友社の設立は、大江義塾中に一八八五年九月『主義ト感情』を同じくする同志的結合体として結成された『大江社』の東都進出であり、全国的展開を企図したものであったと見なすことができる。青年集団という世代論でい

えば、蘇峰は福澤や加藤ら『天保の老人』に対する『明治の青年』を自称し、『第二の維新』の先陣をつとめる意気込みを示しているが、彼らは開国維新の変革と近代国家形成、そして自由民権運動の激流が地域社会を巻き込んでいくなかで成長し、在地の自生的発展に足場を置いていた集団であった。地域社会の改革と国家形成を連動させようとした点、そしてこの意味で国民的な課題を担おうとした点に特色があった。」[7] と述べている。このように地方出身の「青年集団」の一人としてやがて独歩の存在も登場してくるわけだが、独歩は明治21年５月から東京専門学校英学部（同年10月より英語普通科、23年９月からは英語政治科）に入学して、牛込区早稲田町に住むようになった。しかし、徳富蘇峰の知遇を得る機会に恵まれるのは明治24年（1891）１月からで、独歩の「明治廿四年日記」はまさにその１月から書き出されることになる。独歩と蘇峰との接点はこのような雰囲気をもった集団のなかで関係づけられていったわけであり、やがて独歩が教育者としての経験を経て、また新聞記者として日清戦争時に前述の海軍従軍の経験も積むような機会に際会するようにもなり、さらには西園寺公望の「雨声会」[8] へと出席するような「当時の一般的社会風潮であった政治家への野望」（中村青史前掲書）というように、政治的克己心をもった前向きな文学者としての自立を模索していく契機の端緒も、こうした徳富蘇峰およびその結社（民友社）との交流がその基底をなしていたことはよく知られているとともに、きわめて重要なこととして把握しておく必要がある。[9] そうした経歴のなかから「公定ナショナリズム」としての天皇制イデオロギーを構造化した日本型国民国家[10] とのつながりが、独歩の小説に強い影響を与えていることは疑いのないところとみてよいのではないだろうか。

ところで、「国民」とは何かというアポリアについて考察をすすめていくために、日本近代における歴史的・政治的な流れのなかで、「国民」形成のコンセプトを明らかにしていく必要が求められ顧みられることとなるわけだが、明治初年代において西洋事情に詳しい啓蒙思想家は言うにおよばず、キリスト教の信仰者たち、さらにはかつての非政治的階層である農民出身階層・商人層にまで範囲を広げてそれぞれの表象する「国民」のコンセプトを模索していく手続きのなかで、自由民権思想を母体とした活動を通して、そこにはいくつかの代表的なそして普遍性のある「自由」「民権」「国権」の関係性概念が共有されるまでに育まれてきたものと考えられている。具体的には立志社や同志社等の政治的あるいは宗教的・人道主義的なサークルにおいて学習運動を通して理念的・抽象観念的に高められた概念にほかならないわけだが、そうした「民権」に向けての一定の運動が終息した後、前述したように、徳富蘇峰によって創刊された『國民之友』（明治20年２月）は、アメリカの雑誌『ネーション』からそのまま受け継いだ誌名によって、「国民」のコンセプトを追及していくための媒体となったものと考えられる。植田康夫氏は、西田長寿氏の「この雑誌（『明六雑誌』－引用者註）は啓蒙雑誌であるとともに政治批判の雑誌」で、「自然科学と社会科学、文学、宗教の各般にわたっているので、内容の上からは総合雑誌の先駆とも見えるもの」と述べながら、「綜合雑誌の第一にあげられるのは、徳富蘇峰の『国民之友』であろう」[11] という見方や、松浦総三氏の「厳密にいえば、『明六雑誌』よりもその後の『中央公論』や『改造』など総合雑誌の先駆は『国民之友』といえるであろう」[12] という指摘を受けて、植田氏はその「厳密にいえば」の内実を解説して、「総合雑誌とは、政治、経済、社会、国際、文化など、あらゆるテーマを扱い、論文、評論、随筆、小説など、さまざまな形式の記事を採用した月刊雑誌で、知識人向けに発行され」[13] たというステイタスについての重要な指摘がなされている。つまり、「『国民之友』は、蘇峰が作った民友社から創刊され」「創刊号は四六判四二頁二段組で、表紙に『THE NATION'S FRIEND』『政治社会経済及文学之評論』と印刷さ

れていた」「アメリカの雑誌“The Nation”にもとづいてつけられたものである」[14]という点に、月刊誌『国民之友』の読者として想像（内包）されている「国民」（ネーション）の範囲が明確に現われているように思われる。そして前述のように、その民友社の下部組織であった青年サークルから国木田独歩が思想的にも文学者としても紆余曲折を経ながら、形成され自立していくことになるとみてよいだろう。

ところで、福澤諭吉や徳富蘇峰における「国民」のコンセプトの表象について、山内昌之氏は「諭吉や蘇峰がどこかで日本の『国民』と西欧の『ネーション』を比較して、『ネーション』の考えと実体に一日の長を認めたのは、『ネーション』が産業化や教育の発展結果、つまり近代の産物であると信じていたからだろう。とくに諭吉は、『ネーション』の形成を、議会の開設、初等中等教育の普及、啓蒙思想と人民主権、社会的移動の増大、コミュニケーションの発達を伴う近代化現象と結びつけていた。しかし、近代性と関わる『ネーション』は無から生じるわけでなく、それ以前からの歴史や伝統の基盤からつくられる。日本における『国民』のコンセプトも、日本人という古くからの『エトノス』が『国民国家』の形成に向かって蝉脱した『民族』ともいうべきアイデンティティからつくられたのと似ている。」[15]と述べているが、そのように福澤諭吉や徳富蘇峰が日本の「国民」が「発展」すると西欧の「ネーション」になると考えていたとするのなら、近代主義が進んでいくこと、つまりスペンサーにみられるような所謂「社会進化論」の影響[16]について、それは当時のエピステーメであるダーウィニズムの一環でもあるわけだが、明治20年代の日本社会における公共性概念は、こうしてとどまるところを知らないまでに、西欧的近代主義を絶対的な価値あるものとして無批判に受容していく体制が整えられ創り上げられていたとみられるのである。両者にはジェネレーション・ギャップはあるものの、福澤諭吉も徳富蘇峰もその意味では一致して近代主義者、開明推進派なのであるが、それゆえにこそ近代主義偏重のために平衡感覚の欠落した〈ひずみ〉がその後の「公定ナショナリズム」強化のひとつの帰趨でもある帝国主義化への道程について無媒介的に肯定・呼応してしまう危険性を孕んでいたとみることもできるのではないだろうか。「近代性と関わる『ネーション』は無から生じるわけでなく、それ以前からの歴史や伝統の基盤からつくられる」という山内氏の指摘については、牧原憲夫氏の解説[17]においてもその点がよく表出されているものとみられる。

さて、それらの観念から相応の影響を被りながら、独歩は「小民」という概念に固有の意味を与えて収斂させていこうと試みている。独歩の「小民」については、先行研究の蓄積があるが、あまり積極的な評価が先立っていない、と言うよりもきわめて過小評価されているように思われる。[18]そこで、この独歩の「小民」思想の内実とその人物造形について、独歩の小説作品のなかに探究し、「小民」によって意味づけられた日本近代の「国民」のあり様について、その可能性と限界性とを考察検討してみたいとするのが、先のナショナリズムとの関連も含めて小論の趣意であり、次節の検討課題となっている。

三．国木田独歩における「小民」の位相

芥川龍之介は、最晩年の昭和２年４月から雑誌『改造』誌上に４回にわたって「文藝的な、餘りに文藝的な」の表題のもとにエッセイを連載する。[19]その第１回目には「―併せて谷崎潤一郎氏に答ふ―」という副題をもっていることからもよく知られているように、所謂芥川と谷崎との間に交わされた「小説の筋」論争（プロット論争）として日本近代文学史上にその名をとどめている。[20]その

「文藝的な、餘りに文藝的な」の「二十八　国木田独歩」というパラグラフは、連載2回目（21～28）（『改造』昭和2年5月号）の最後部として書かれ発表されたものである。その文章のなかで芥川は、独歩をある種の自己投影を禁じえない対象として眺めながら、きわめて抑制の利いた理知と情愛とをもってストイックな独歩像を創り上げている。たとえば、「国木田独歩は才人だつた。彼の上に与へられる『無器用』と云ふ言葉は当つてゐない。独歩の作品はどれをとつて見ても、決して無器用に出来上つてゐない。（中略）しかし独歩の『無器用』と云はれたのは全然理由のなかつた訣ではない。彼は所謂戯曲的に発展する話を書かなかつた。のみならず長ながとも書かなかつた。（勿論どちらも出来なかつたのである。）」[21] と、芥川龍之介のアフォリズム調の言説が続いている。このように芥川が言うとき、その卓抜な他者理解に瞠目させられるわけなのだが、ただし「他者」といっても、それは独歩という、あるいは独歩を通して、孤独な芸術家とその芸術作品とを分析し翫賞しているわけなのであって、やはりそこには自分自身の解剖所見が加わっているようにも読めてしまう感想なのである。それは、わずか37歳にも満たず夭折した独歩に、35歳半ばにしてすでに意識のうえであるいは身体的にも最晩年のような疲労を感じていたであろう芥川の「末期の眼」のはたらきという事情を斟酌してしまうために感じられるある程度カッコつきの「印象」でもあると思われるわけだが、しかし、その人物素描は、まるで芥川の自画像そのもののようにも感じられ、それは独歩が常に言及し心がけてもいた「他の吾」という捉え方に共通するような芥川における「他者」理解の反映のようにみることができるものなのである。「独歩は鋭い頭脳を持つてゐた。同時に又柔かい心臓を持つてゐた。しかもそれ等は独歩の中に不幸にも調和を失つてゐた。従つて彼は悲劇的だつた。二葉亭四迷や石川啄木も、かう云ふ悲劇中の人物である。」[22] と独歩に並べて、二葉亭と啄木とを同様に「鋭い頭脳」と「柔かい心臓」とが二律背反の所与として互いを傷つけあうような「悲劇中の人物」という存在に閉じ込めて、その「悲劇」を解読している芥川自身の「劇」は、やはり「歯車」（『大調和』昭和2年6月、後に『文芸春秋』昭和2年10月）のような神経的な音の無い世界なのであろうか。そして芥川はこのように書いたとき、まさに「悲劇中の人物」（傍点―引用者）であったことに間違いない。死者に鞭打つことはできない、生きている芥川自身に向かって、このアフォリズムは利いている。なぜなら、未だ「悲劇」は演じられ続けているのだから。ところで、この「小説の筋」論争について、臼井吉見氏は、芥川の「僕が僕自身を鞭うつと共に谷崎潤一郎氏をも鞭うちたいのは（僕の鞭に棘のないことは勿論谷崎氏も知つてゐるであらう。）その材料を生かす為の詩的精神の如何である。或は又詩的精神の深浅である。谷崎氏の文章はスタンダアルの文章よりも名文であらう。（暫く十九世紀中葉の作家たちはバルザツクでもスタンダアルでもサンドでも名文家ではなかつたと云ふアナトオル・フランスの言葉を信ずるとすれば）殊に絵画的効果を与へることはその点では無力に近かつたスタンダアルの諸作の中に漲り渡つた詩的精神はスタンダアルにして初めて得られるものである。フロオベエル以前の唯一のラルテイストだつたメリメエさへスタンダアルに一籌を輸したのはこの問題に尽きてゐるであらう。僕が谷崎潤一郎氏に望みたいものは畢竟唯この問題だけである。『刺青』の谷崎氏は詩人だつた。が、『愛すればこそ』の谷崎氏は不幸にも詩人には遠いものである。『大いなる友よ、汝は汝の道にかへれ。』」[23] という箇所を引用して、「谷崎の主張する小説の『構造的美観』に、芥川は、『詩的精神』を対立せしめようとしたものと見るべきであろう。そうかといって、かんじんの『詩的精神』が、彼のいう『「話」らしい話のない小説』にのみ存すると断言するほどのつもりはなかった。もともと『「話」らしい話のない小説』などを言い出したのも、話のある小説しか書かなかった、も

しくは書けなかった自分にあき足らず、無意識のうちに成るような境地をしきりに望んでいたときだったからにちがいない」として、「この論争もつまりは問題をどれほどもおし進めることもなく、無論何ひとつ解決はしなかった。両者の作家的素質を鮮明に照し出したにすぎなかったのである。」[24] と論じるにとどまった。この論争における中心をなしている小説観の対立とみなされている私小説あるいは心境小説と本格小説あるいは大衆小説とをめぐる「小説の筋」論についての最近の論点は、また多角的な視点からの検討がなされているが、この点については本論考の任になく、いずれ別稿を期したいと考えている。

さて、ここから国木田独歩の小説における「小民」について、さらに論を進めていくことにする。滝藤満義氏が独歩の「小民愛」について論じているように、もちろん周知のことではあるが、これは、『欺かざるの記』（明治26年3月21日）における次のような記事にもとづいて明瞭化されてきた独歩の問題提起を端緒としたものなのである。そこで独歩は、「多くの歴史は虚栄の歴史なり、バニティーの記録なり。人類真の歴史は山林海濱の小民に問へ、哲學史と文學史と政権史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。多くの歴史は歴史家の歴史なり、（人間心霊、ヒューマニティの叫聲を記録せよ）、學者の歴史なり、政治家の歴史なり、彼等脳裡の楼閣のみ。傳記は斷じて歴史より貴し。」[25] と述べているように、「多くの歴史は歴史家の歴史なり」「學者の歴史なり、政治家の歴史なり」という既存の歴史批判を行うかたちでその「虚栄」を排撃し、「人類真の歴史」として「小民史」の創設を、熱く語っているのである。卒然として悟達したかのように意味深長な「小民」というキーワードが現われ記されている。明治26年のこの時期は、独歩にとってどのような時期であったのか。独歩は23歳であった。その2年近く前の明治24年12月から郷里の山口県田布施村で開いていた「波野英学塾」[26] を閉鎖して、翌25年6月におよそ1年ぶりに2度目の上京を果たし、民友社系出版物である『青年文学』の編集などに参加していた。そして、件のワーズワース詩集を入手したのもこの明治25年9月頃で、その影響著しく「田家文学とは何ぞ」（『青年文学』明治25年11月）という論文を発表しているほどである。[27] そのような精神的昂揚期のなかにあって、前出の『欺かざるの記』を起筆したのが、明治26年（1893）2月3日であった。その同じ月に独歩は自由社に入社している。自由社とは、自由党の政治団体として、民権派の言論を主体に出版や集会などの各種事業を行う団体で、機関新聞『自由』を発刊していた。[28] 矢野龍渓や徳富蘇峰の『國民新聞』にも関係する結社であったが、同年4月に経営不振に陥ったため、業務の整理縮小にともない独歩は解雇されている。5月、『青年文学』廃刊。8月には、父専八も柳井裁判所詰を免職となる。独歩とその周辺の運命の歯車は未だ空転することのみ急であり、なかなか安定という状態からはほど遠い青年期の継続状態を過ごしていると言うことができるようである。そうした状況からの心機一転もあって、徳富蘇峰の紹介および矢野龍渓の推薦により、同26年9月30日に大分県佐伯にある私立夜間中学校鶴谷学館の教頭として、弟収二を同伴して当地に赴任し、10月から英語と数学を教授した。翌27年8月1日に佐伯を去るまでのわずかに10ヶ月ほどではあったが、独歩にとって佐伯はワーズワースの詩境に響きあう〈場〉（トポス）として、独歩自身の文学的精神風土、小説家としての自意識を形成することへとつながり、3年後の「源おぢ」、4年後の「鹿狩」、10年後の「春の鳥」などの小説に結実し、いずれも独歩の代表作となっていることはよく知られている。[29]

さて、先の『欺かざるの記』（明治26年3月21日）における「小民および小民史」の記述直前に、独歩のある種昂揚感に満たされた言説が書き記されている。「虚栄の妄想、僥倖の浮念は少壮者の常

なる如く、吾にも亦た往々如此、之れ悉く社會生活の魔力なり、吾が思想は社會生活の為に動き、吾が感情は社會生活の為に涌く、之れを以て虚栄僥倖の妄想浮念より脱する能はず、哀い哉。社會生活の為に心酔せんよりは、彼の浮世の夢かこちて現世を捨てたる西行たる方、如何に高尚なる可き、如何に理想的なる可き、此の社會に居て吾の労働せんと欲するは社會生活の上に光栄富裕をつかみ取らんとに非らず、実に吾が理想の存在を信ずればなり。人間心霊の叫聲を聴きて世を教へんと希望する者は、爾自ら先づ霊の命を得べし。」[30] というインスパイアーがなされて、さらに「昨夜は吾に取りて、極めて主要の夜なりけり。昨夜吾は断然文學を以て世に立たんことを決心せり。則ち『人間の教師』として吾が力に能ふだけを努めて此の世を終ることは最も吾が命運に適し、吾が生を値するを信じたり、吾が政界を悪むに非ざるも、吾は政界に立つ以上はやゝもすれば権勢を愛し、虚栄を願ふ為に狂奔するを免れずと信ずればなり。吾は自ら大なる名誉高き文學者を希望するに非ず、文筆を以て小學校教師たるを得ば甘ずべし、只だヒュマニティーの自然の聲を聞き、愛と誠と労働の真理を吾が能くするだけ世に教ゆるを得ば吾が望み足れり。」[31] と昂揚感の頂点に達した言説が書き連ねられている。そこから、先の「小民および小民史」への理解（「ヒュマニティーの自然の聲を聞き、愛と誠と労働の真理を吾が能くする」）が出てくることになるのである。ここで、独歩が明治26年３月21日に書きとめた「昨夜は吾に取りて、極めて主要の夜なりけり」と記した「昨夜」の３月20日には何が書かれていたのか。「二十日、午後。薄暮青年文學社より帰り来たりてこの記を書す。吾は教師を希望す。吾は出来る丈けの教師たる可し、人生の批評は吾が事業たる可し。アゝ吾は人情の為に此の生命を投ぜん、見よ土を掘て一生を終る者あり、絶海の孤島に一生を終る者あり。神よ助け給へ。アゝ爾の周辺を見よ、如何に悲しき世界よ！爾の友等を見よ、如何に悲しき人間の運命！」[32] とあることから由来している。「土を掘て一生を終る者あり、絶海の孤島に一生を終る者あり」とあるように、「小民」への意識化が行われ、「吾は人情の為に此の生命を投ぜん」と強い調子で「小民」への「人情」を主命とするごとく決意を固めている言説が述べられているのである。

ところで、繰り返しになるが、徳富蘇峰は明治20年に民友社を設立し、ついでその創刊による雑誌『國民之友』（明治20年２月15日）および『國民新聞』（明治23年２月１日）にあるように、時代のキーワードであり、アナグラムとしても潜在化している概念として、理念としての「国民」を措定し、媒介とさせたということの共通感覚は、その当時の自由民権運動からゆるやかに「結論」づけられていった「ネーション」への期待を表象化したもののように思われるわけだが、その同時代的な動向に強く影響を被った国木田独歩においては、こうした「小民」という何らの特権的な必要条件をもたない「下層民」の慎ましやかな生活の営みの蓄積のなかに、「民権」（国民としての権利）の基本・根幹を発見したのではないかというように考えられる。小説「忘れえぬ人々」（『國民之友』明治31年４月）は、まさにそうした「小民」への〈まなざし〉そのものの作品化であるように思われ、それは蘇峰の『國民之友』や『國民新聞』というメディアが、当時の「公論」を表出し形成していくメディアとして期待された、あるいは独歩自身が理想を抱いたこととも関係して、近代日本における「小説」という新しい文学ジャンルと雑誌や新聞という近代以降の新たなメディアとが共働して創り出していく相互媒介的な出来事・現象であり、その基底には、たとえば幕末維新期における「風説留」という情報資源の厖大な積み重ねと経験とが、かつては非政治的な階層であった人びとの意識を変容させ、改革させていった過渡期のメディアとして、そこに通底・横溢しているコアな意識の存在と連続した働きとがみられるものではないだろうか。国木田独歩の小説を、「小民」という一貫した観念によっ

て表現された作品世界としてのみ捉えることはもちろん十分ではないと思われるが、独歩が近代国民国家の形成において要請される「国民」としての概念・理念とは異なる次元において生成する「小民」という社会的弱者に注目したこと、その「小民」を同時代のアナグラムとして求められた「国民」との対比のうちに評価・検討していくことは、やはり大事なアプローチなのではないだろうかと考えられるのである。

そこで先ず、独歩の初期短編小説「忘れえぬ人々」（『國民之友』、明治31年4月）について考察することから始めたい。「多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。其中程に亀屋といふ旅人宿がある。恰度三月の初めの頃であつた」と書き出され、この溝口の旅宿亀屋で偶然に一晩同宿した二人の青年、一人は文学者大津弁二郎、もう一人は画家秋山松之助というどちらも二十六、七歳くらいの肩書も何もない無名の若き芸術家である。二人は美術論から文学論、宗教論まで語り合った後、大津の未定稿「忘れ得ぬ人々」に話頭が移る。大津が眼に少しばかり涙をうるませながら語り始める。すなわち、「親とか子とか又は朋友知己其のほか自分の世話になつた教師先輩の如きは、つまり単に忘れ得ぬ人とのみはいへない。忘れて叶ふまじき人といはなければならない、そこで此処に恩愛の契りもなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本来をいふと忘れて了つたところで人情をも義理をも欠かないで、而も終に忘れて了ふことの出来ない人がある。」[23] として原稿表題の「忘れ得ぬ人々」に込められた概念規定についての解説から行う。そうして、その「忘れ得ぬ人々」の具体例として、第一番に十九歳の春半ば東京から郷里へ戻る大津が「瀬戸内通ひの瀛船」から眺めた雲雀の鳴きしきる小さな島で「退潮の痕の目に輝つてゐる処に一人の人がゐるのが目につい」て、「何か頻りに拾つては籠か桶かに入れ」「二三歩あるいてはしやがみ、そして何か拾つてゐる」「此淋しい島かげの小さな磯を漁つてゐる此人」である。次は、今から5年程前の正月に「九州旅行に出かけて、熊本から大分へと九州を横断した時」、大津が弟と二人で阿蘇の噴火口を見た後、「宮地といふ宿驛」を目指して阿蘇の草原を歩き降っていくと、「暫くすると朗々な澄むだ聲で流して歩るく馬子唄が空車の音につれて漸々と近づいて來た。」「『宮地やよいところじや阿蘇山ふもと』といふ俗謡を長く引いて」「二十四五かと思はれる屈強な壯漢（わかもの）が手綱を牽いて僕等の方を見向きもしないで通つてゆくのを僕はぢつと眺視めてゐた。」「僕は壯漢の後影をぢつと見送つて、そして阿蘇の噴煙を見あげた」とある「此壯漢」のこと。三人目が、「四國の三津ケ濱」の朝の魚市に並ぶ露店先に立つ「歳の頃四十を五ツ六ツも超たらしく、幅の廣い四角な顔の丈の低い肥満た漢子（もとこ）」の「琵琶僧」で、「僕はぢつと此琵琶僧を眺めて、其琵琶の音に耳を傾けた。此道幅の狭い軒端の揃はない、而も忙しさうな巷の光景が此琵琶僧と此琵琶の音とに調和しない様で而も何處かに深い約束があるやうに感じられた。」と話す。その他に「北海道歌志内の鑛夫」「大連灣頭の青年漁夫」「番匠川の瘤ある舟子」などが、この原稿に書き込まれているという。ここまで、大津の言説は聴き手に対してはかなり特殊な印象を与えるような話のように思われるが、秋山からの応答はただ一度だけ三人目の「忘れ得ぬ人」の話のあとの間隙に、「それから。」と促しただけであった。しかし、大津は「僕がなぜ此等の人々を忘るゝことが出來ないか」「なぜ僕が憶ひ起すだらうか」という自問自答を行う。それは、大津自身の側にある謎を解いていく「僕は今夜のやうな晩に獨り夜更て燈に向つてゐると此生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催ふして來る。その時僕の主我の角がぽきりと折れて了つて、何んだか人懐かしくなつて來る。色々の古い事や友の上を考へだす。其時油然として僕の心に浮むで來るのは則ち此等の人々である。さうでない、此等の人々を見た時の周囲の光景の裡に立つ此等の人々であ

る。」[34] というようにいくらか複雑で屈折した言い回しではあるが、つまりは「地」と「図」との関係において「忘れえぬ人々」という表象化が行われて決定的な意味の固着がなされてしまうというきわめて重要な心性とみられる感慨（心象風景）について語られていて、そのコアな心性に働きかける主要因は、「孤立」感に根拠をもつ「哀情」にほかならないとされている。ここで、日本文学というよりも東アジア文化圏、つまり漢文学に特徴的なことの一つとして、先の「地」と「図」との関係性の問題がある。すなわち、「図」は常に「地」との相互媒介的な関係性のうちにその表象化が行われ、意味をもたされるということである。「地」あるいは「図」が単独で可視的になることはあり得ないという認識過程・意識構造が大切にされる文化圏として東アジアの固有性がみられるのではないかという理解をしておきたい。[35] 欧米においては、一般的に中心となる対象（図）のみが可視化され、周辺環境（地）との相対的関係はあまり問題にされないことが分かっている。つまり、ここでは「小民」（人物＝「図」）と「風景」（背景＝「地」）とは、その総合的な関係性のうちにテクスト化されている文化的記号として意味をもっているということなのである。また、柄谷行人氏は「島かげにいた男は、『人』というよりは『風景』としてみられていること」というように「人物」と「風景」との認識の差異を述べたうえで、「語り手の大津は、ほかにも『忘れえぬ人々』を沢山例にあげるが、それらはすべて右のように風景としての人間である。」[36] と指摘する。その意味において、この「忘れえぬ人々」の主人公大津弁二郎は、孤独な小説家というよりも、小説家であるがゆえの孤独な存在ということのできる人物造形であり、「小説」という社会への対峙のあり方そのものが、「孤立」感を際立たせてしまうクローズド・サーキットでもあり、故郷や共同体におけるゆるやかな「連帯」を離れた近代主義的なあり様としての〈孤独〉な生命化であり、身体化であることが理解できるのではないだろうか。かつて小林秀雄は、「故郷を失つた文学」（『改造』、昭和４年８月）において、「いつだつたか京都からの歸途瀧井孝作氏と同車した折だつたが、何處かのトンネルを出たころ、窓越しにチラリと見えた山際の小徑を眺めて瀧井氏が突然ひどく感動したので驚いた。あゝいふ山道をみると子供の頃の思ひ出が油然と湧いて來て胸一杯になる、云々と語るのを聞き乍ら、自分には田舎がわからぬと強く感じた。自分には田舎がわからぬと感じたのではない、自分には第一の故郷も、第二の故郷も、いやそもそも故郷といふ意味がわからぬと深く感じたのだ、思ひ出のない處に故郷はない。確乎たる環境が齎す確乎たる印象の数々が、つもりつもつて作りあげた強い思ひ出を持つた人でなければ、故郷といふ言葉の孕む健康な感動はわかないのであらう。」[37] と述べていて、小林秀雄的な「自己言及・私批評」の固有な表現であるわけだが、独歩の「忘れえぬ人々」と関連して、ここにはきわめて示唆的な洞察が含まれていると思われるのである。先ず小林は、自然主義以来文壇的小説家の書く作品が「若い者相手の特別な世界」であり、それらの作品の特徴は「等しく觀念的であり、即物的な味ひが自然主義以来益々歓如して」きており、大人の読物として容易ではないことを指摘する。一方で、「わかり切つた事が故意に面白さうに書いてあつて、それ以上發見が語られてない」大衆作家の「通俗現代小説を世間の成人達が読むとは」考えられないため、結局「喬物」を読むことになるという。そうした実情は、映画においても同様だと小林は指摘し、「喬もの小説やチャンバラ映畫が大衆の間に非常な力をもつてゐる」ことについて、小林は「彼等の心をつかんでゐるものは、もつと地道なものなので、作品に盛られた現實的な生活感情の流れに知らず識らずのうちに身を託すか託さないかといふ處が、面白いつまらないの別れ道だ」と言う。当時封切られた映画「モロッコ」の内容は浅薄だが、「内容がどうかうなどてんで言はせないで觀客の心を引きずつて行くその魅力」があると述べ、

「現代ものの日本映畫や、通俗現代小説に一番欠けてゐるものはこの理屈のない魅力なのだ」と、小林は断言する。つまりこの「魅力」こそが、国木田独歩の「忘れえぬ人々」に通底している「忘れて叶ふまじき人」ではない「終に忘れて了ふことの出來ない人」へと結びつく〈謎〉解きと考えられるのである。ここで小林のみている「魅力」とは、いったい何か。その点について、小林は「チャンバラ映畫や揺物小説に現れる風俗習慣は、西洋映畫に現れる風俗習慣と同じくらゐ既に私達から遠いものだ。併しさういふ社會的書割にしつくりあて嵌つた人間の感情や心理の動きがある。さういふ離離のない人間生活の動きが何んとはしれぬ強い魅力となつて現れる。この魅力が銀座風景よりも、見た事もないモロッコの砂漠の方に親しみを起させるものだ。」[38] と極めつけていて、きわめて重要な指摘であり、感想でもあると思われる。そうしてその「魅力」こそが、こうした「小説」や「映画」というメディアにおいて、その「内実・内面」描写を可能にし、描写された「内実・内面」を鑑賞し、感情移入することが可能となり、そこに普遍的な意味や価値を見出すことへとつながっていくことになるのである。小林秀雄の表現になおすなら、「何んとはしれぬ強い魅力」という修辞というより、曰く言い難いものになるのであろうか。そして、前述の人物（図）と風景（地）との相互媒介的な関係性の重要性について、小林は「さういふ社會的書割にしつくりあて嵌つた人間の感情や心理の動き」「さういふ離離のない人間生活の動き」を「魅力」として繰り返し称揚しており、その見解の共通性に重要な意味や価値を見出すことができるものと思われる。同様に吉本隆明氏は、おそらくその点にかかわる「魅力」について夏目漱石の小説に言及しながら、「読者としてどうして漱石に引かれたんだろうかみたいなところから始まって、漱石の文学は、作品は何故いいんだろうかというところに行って、それからいい文学作品というのはどういうんだろうということについての考え方が副産物として自分の中に出てきた。それは僕なりのあっさりした言葉で単純に言ってしまえば、つまりなぜおれは漱石の作品に惹かれたんだろうなということに帰着するわけです。結局は、作品を読む読者に対して、こういうところはおれだけしか分からないよというふうに思わせる、本当はそんなことじゃないんですけど、そう思わせる要素が多い作品はいい作品なんじゃないか」[39] と言っていることに通じ合うような、おそらく相同関係にあるようなものと考えてもかまわないのではないだろうか。

ところで、独歩小説に描かれている人物たち、たとえば、初期作品の「源おぢ」（『文藝倶楽部』、明治30年８月）、「忘れえぬ人々」（『國民之友』、明治31年４月）、「死」（『國民之友』、明治31年６月）から、中期にあたる「牛肉と馬鈴薯」（『小天地』、明治34年11月）、「富岡先生」（『教育界』、明治35年７月）における人物像でも、後期の「窮死」（『文藝倶楽部』、明治40年６月）、「竹の木戸」（『中央公論』、明治41年１月）、「二老人」（『文章世界』、明治41年１月）のなかに登場する人びとについてでも、彼らは「小民」と呼ばれる階層に位置づけられ、その「小民」とは、形容詞句的な発想ではあるが、福澤諭吉の言説の「『国の』執政に非ず、亦力役の小民に非ず」（『学問のすゝめ』）にもあったように、「民」における（大／小）の差異化から、つまり「大民」との字義的対比のなかから概念化されたものであり、その意味で「大民」とは一般的に官吏や役人のことを指標する漢語であるため、「小民」とは非官職という前提を、きわめて類型的な捉え方ではあるが、本質的・必然的に含意している（属性記述される）ことになる。もちろん、そうした語源的な「小民」概念にとどまるわけではあり得ない。独歩の小説作品を分析し類型化した先行研究として、片岡懋氏の「独歩の『小民史』」（『文学』岩波書店、1952年11月号）、猪野謙二氏の「独歩における『政治』」（西尾実・小田切秀雄編『日本文学古典新論』岩波書店、1962年12月）、山田博光氏の「独歩と民友社」（『文学』岩波書店、1965年１

月号)、辻橋三郎氏の「国木田独歩と民友社」(『キリスト教社会問題研究』1968年3月)、北野昭彦氏『国木田独歩の文学』(桜楓社、1974年9月)などが、早い段階から「小民」論を中心とした独歩論を展開していて、そのように戦後の50年代から60年代にかけての時代性を帯びた観点からの捉え直しがあったわけだが、その点について重要な論点のため、重複の煩を厭わずに再度引用してみるなら、滝藤満義氏の言うように、「他者を作品世界の中になかなか取り込めないということを言いましたが、これは独歩に限らず、かなり日本の近代作家にも通じて言えることではないかと思いますが、それとの関連で、やはり彼の小民愛、あるいは女性に対する愛の問題も出てくると思います。小民愛から言いますと、独歩が『欺かざるの記』の中で小民史を主張したということもあり、戦後ひところ独歩が小民に非常に愛情を持って彼らとの連帯感を作品に描いているのだと言って高く評価するむきもありました。しかしこれはちょっと疑問に思います。『欺かざるの記』に『他の吾』という言葉がひとしきり使われたことがあります。この「他の吾」という言葉が独歩の小民愛の性格をかなり明らかにしてくれるのではないかと思います。つまり独歩の言う『他の吾』というのは自分が共感・共鳴できる、当時の彼の言葉で言えば『同情』できる他者の一部であり、他者そのものを受け入れることではないというふうに思います。その意味で『他の吾』というのはあくまでも吾の一部であり、吾の拡大したものに過ぎないというふうに言えるのではないでしょうか。」[40] と論じていて、ひとつの確かな見通しを立てているように思われる。そして、前述の「小民」論のなかでも山田博光氏の論にあるように、「明治の近代文明とは無縁に、太古さながらの自然と人間の融合した生活を営む山林海浜の小民たち、たとえば『源おぢ』の源おぢや紀州、『忘れえぬ人々』の登場人物たち、または白痴なるが故に子供なるが故に自然にもっとも近い『春の鳥』の六蔵や、『鹿狩』『画の悲み』『少年の悲哀』『馬上の友』『山の力』の少年たち。次に明治社会の下積みの小民たちがある。ある者は明治社会の発展にとり残され、ある者は貧乏なために明治社会から疎外されている。たとえば『二少女』『河霧』『富岡先生』『酒中日記』『窮死』『竹の木戸』『二老人』の主人公たち。第三に明治の社会体制の中で功名を求めず、誠実に無名の人生を生きる善良な小民たちがある。『非凡なる凡人』『巡査』『日の出』の主人公たち」[41] という3パターンに分類整理する考え方のあることはよく知られている。その点について新保邦寛氏は「小民」解釈をさらに拡大して、石川啄木の『時代閉塞の現状』を受けて、日清戦争後の「自己省察と個我の拡大を通過して初めて、〈小民〉との距離は縮まり、後の『窮死』や『竹の木戸』のような、作者との紐帯をもった〈小民〉、むしろ作者がその〈心〉に溶け込んでしまっているような〈小民〉が生み出された」「晩年の独歩が〈小民〉の理解の幅を広げていたことは、先ず確実に言える。例えばオムニバス形式の小説『渚』(『文章世界』明40・12)中の一篇『里芋』である。男共に弄ばれ、誰のとも知れぬ子を孕み乍ら、それでも平然としている〈お菊〉のようなアモラルな〈小民〉像は、以前の独歩の眼には決して映ることのなかったものであろう」[42] という分類整理を行っていてきわめて示唆的な見解であり、全体としていくらか批判的な異なる見解へと導いている点が、また新たな研究の可能性と方向性とを衝き動かしているともみられる。しかし、この新保氏の見解を相対化する論考が続かないのは、独歩の「小民および小民史」への関心を政治的・社会的な問題に還元してしまうのではなく、文学の側の問題(あるいは文学の近代化の問題)としてまとまった見解を提出することの未だ出来ていない状況に、反ってその困難さを看取してしまうものでもある。

ところで、前述の山田氏による「小民」の類型化の指摘について、中村青史氏は「確かに〈小民〉には種類がある。一括できるものではない。『忘れえぬ人々』の登場人物の中でも、阿蘇山麓での馬

を引いて通り過ぎた若者と、三津ケ浜での琵琶法師とでは質的に違う感じである。ともかく〈小民〉を掘り下げることは、その背景に民友社解明が前提条件となるわけで」[43] と述べている点に見逃すことのできない思想的背景への指摘がなされている。「小民」についての考察は、このような研究レヴェル的な視点から腑分けされて類型化されているように思われるわけだが、実際には決して類型化され得ないような存在のことを「小民」と呼ぶものであり、つまり人間の序列化を「国民」という近代概念における適合条件の基準と規範とにもとづいて、そのヒエラルキーを確定しようとする近代国民国家の成立過程における「国民」形成（ネーション・フォーメーション）に関連する重要課題であることが先ず前提として理解されなければならないわけだが、そうした序列化に対して消極的に抵抗し、沈黙のうちに敵意を抱くものこそ「小民」という表象なのではないだろうか。そして、さらにここで問題として明瞭化されてきたことは、国民国家の「国民」として想像され期待される内的統合性が、普遍的理念として超越的に擬制されていく政治的なあり様と、そうした普遍性という虚構の形象化をあたかも「画餅」として無意味なモジュール（学習塑型）へと貶めてしまう現実のエネルギーの衝突が行われ、やがて交代されていくという歴史的事実がみられることである。

独歩が、このように「小説」というジャンルのなかで実現しようと意図したことの大きな計画に、「小民」への親和的な〈まなざし〉を通して「小民」史とみなされるような歴史的なまとまりをもった表現、これは全くの想像に過ぎないものだが、後に柳田国男の「常民」[44] とも接続するような観点から、そうした人びとをたくさん描いていく過程をみることが出来るのではないだろうか。またそれは、前述したように、福澤諭吉の提案するところの「国民」のコンセプトとして志向された「中間層」（ミッヅルカラッス）の策定・形成にかかわる問題のなかで、「『国の』執政に非ず、亦力役の小民に非ず、正に国人の中等に位し、智力を以て一世を指揮したる者」（『学問のすゝめ』）というように、「執政」と「小民」とを二極化して隔てていることからも分かるように、独歩の言う「人類真の歴史は山林海濱の小民に問へ」（『欺かざるの記』）という言説にみられる「小民・小民史」への関心は、福澤たち啓蒙思想家の策定している「国民」のコンセプトとのとうてい埋められないギャップからスタートしているように思われる。あるいは、「国人の中等」と措定されている「中間層」である「国民」普遍概念の想定に対する批判であり顛倒であり、〈均質化・平準化〉されることの決してない〈外部〉であるような存在としてみられるものなのではないだろうか。そうした「小民」へと独歩の意識の向かう背景には、独歩自身が明治の学校制度において〈傍流〉になってしまったことからくる内省が関係しているように思われ、小民愛や小民理解ということの根底に、エリートからの転落という物理的な事情が反映されているようにみられ、その意味でエリート意識と表裏する関心の傾きとして捉えられるのではないだろうか。しかし、ここで昭和前期のプロレタリア文学との相違でもあり、同時に共通性・限界性でもある資質として興味深いのは、独歩の出身階層が全く「小民」ではあり得ないということを前提としており、それはたとえば、独歩の死後母まんの「父は自分が官史なものですから彼を矢張り同じ道にと思つたものです、で帝國大學へ入れて法學でも修めさせ様とばかり望んで居ましたので、高等學校へでも志願させ様と勸めましたのだけれど、我意を以て貫く氣質なのですから其勸にも頓着なく、獨り思ふ仔細あつて早稲田の英語政治科へ入りましたのです。それも亦自分獨り考で見捨てるに至りました。」[45] という回想が示すように、独歩はもともと長男として「家族」のなかにおける貴族的な立場にあったわけで、その意味からも明治社会のエリート志向に合致していたことになる。ところが、父の非職という官僚制度上の不運な見直しや処遇から、保守本流としての

エリート・コースから外れてしまったのである。独歩自身の田山花袋と自分とを比較した言葉のなかに「渠は比較的逆境に人となり、余は昔より坊ツちやま育ちなり。」(『獨歩病牀録』)[46] という箇所が出てきて、まさにそのとおり幼少期から少年期のもっとも基層を積み重ねていく人間形成の時期において、独歩は「坊ツちやま」として育てられ成長した記憶と経験とをもっており、そうした経験知によって培われた意識や感受性は、「小民」とは本来決定的に相容れ難いもの、つまり決して〈主体〉にはなることのない〈客体〉としての「小民」であるということ、眺める対象としての「小民」であるということの本質的な意味を捉えておくことが、独歩の「小民」について考察するうえで必要かつ大事な観点ではないかと思われるのである。そうした意味で、独歩の「小民愛」は、「小民」の内部からの連帯意識や仲間意識ではなく、「小民」の実質を経験ではなく、知的に理解しようと美的に描き働かせようとする対象として捉えたものであり、それゆえに寧ろ読者に強く印象づけることができたものと思われる。そこには、独歩のような描き方でなければ決して読者に伝わらないものがあって、独歩はそれを知悉して迷わず描ききったものといえるのではないだろうか。たとえば、「二少女」(『國民之友』明治31年7月10日)などを参照するなら、そうしたことが如実に立ち上がってくるのである。この問題に関して、読者あるいは「内包された読者」の立場を論点として、もう少し考察を続けてみることにする。独歩作品の読者は、作中人物の造形やその人物を待ち受けているストーリーについて、読者の側から過剰に読み取ろうとするリズールにおけるダイナミズム(力動)が働いてしまうのではないだろうかということを問題にしたい。つまり、〈先読み〉とか〈深読み〉とか言って差し支えのない読解を無意識のうちに強いられてしまうように感じるのである。

それは、何故か。答えは、簡単明瞭である。平易な言葉を用いるのなら、〈どうなるか心配で仕方がない〉からということになるのである。その人物の過酷な境遇や悲惨なシチュエーションやその所与において健気で正直に生きていく人物設定、出口の見えない閉塞した展開空間のうちに、一体どのようにして解決の糸口を見出していこうとするのか、どのような安寧を得ることができるのかという諸々の心配が作品のストーリーに先駆けてしまって、作品に書かれて存在しているものを「読解」するというよりも書かれるべきそう在って欲しいものを「諒解」したいという読書行為における読者意識が働いてしまうということなのである。このような読書行為は、認知心理学的な「理解」の問題に関連しているものなのかもしれない。要するに、ここでの読者としての「心配」とは、独歩の小説におけるカタルシス(浄化作用)をどのようにして得ることができるのかという「心配」であり、感情移入や同情心などの所謂社会良識的な〈振り子〉が振れてしまうために他ならない「心配」なのである。人として時代や場所や状況を異にしても変わらずもち続けている普遍的な〈振り子〉が、こうした独歩の小説のなかには入り込んで構造化されている。否、独歩の読者たちのなかにある〈振り子〉を共振させる何らかの始器(スターター)のようなものが、独歩小説のなかには存在しているということなのであろう。それを「小民愛」とみなして、先行研究や従来の鑑賞を通して認識し、評価していたのである。ここに、国木田独歩の小説作品における重大な秘密の「魅力」が存在していると考えられるのである。これは、作品に通底する「魅力」として、独歩文学を近代小説として普遍化と個性化とを行わしめた動力(ダイナミズム)に他ならないものだが、それはきわめて不思議な動力であり、個人の個性的な表現力に由来するものだけでは決してあり得ない能力ではないだろうか。独歩ひとりの固有性にのみ根差した芸術的表出、近代文学としてのたとえば自然主義文学において特徴的な社会性や反社会性や社会的な現実認識や人間の真実といったような内面化した内在的な「シンセリティ」

（誠実・正直）などではないように思われる。独歩を読み解くキーワードのひとつに「シンセリティ」というものが用いられていることはよく知られているわけだが、そのような批評的な検討や批判的鑑賞の力は、かなり弱いように思われる。つまり、従来の研究のある部分において「シンセリティ」として独歩のコアにある人生の課題や理想、あるいは思想そのものを語り尽くそうとする手続きでは、全く不十分である。独歩の理念や思想、つまり「魅力」を詳らかにしていくための鍵は、近代以降のステレオタイプな批評や批判的なクリティークのあり様ではなく、近代以前に存在している、独歩の抱いた「小民愛」にコミットしていく思念より以前から存在し、背景化している伝統的な人びとの生活を成り立たせていた感性・感受性に通底している要素が重要な働きかけを読者に対して行っているとみなしていかなければならないものなのであると考えられる。この近代以前からつながっている「理解」というものに潜在化しているある種の自動化の力、つまり〈読む〉という行為をある普遍的な人間理解や状況把握、近年の「空気の読める」というとたちまちにして安価であるが、そうした雰囲気や空気感覚へと導いていくことを可能にしてしまう「自動性」というものの内実について、答えを出していかなければならないのである。

ところで、「小民」をうたうにあたって、「小民」のなかから「小民」と自ら同化してうたううたい方もあるわけだが、「小民」をうたうその立場が別の「場所」に設定されていて、その隔たりのあるところからうたうとするのなら、それはまた異なる意味を生み出すような「小民」へのかかわり方（コミット）となるわけで、そのとき「小民」は経験ではなく、〈みられる〉もの、つまり対象となってしまい、表現される媒体、修辞的なモチーフ（スティル・ライフ）としての次元を異にした現実と乖離した〈理解された〉概念でしかない対象に終始してしまう。独歩は、そうした事情をよく分かっていた表現者であったと思われる。表現（意味）するものと表現（意味）されたもの、つまりソシュール以来言われてきた〈シニフェ〉と〈シニフィアン〉との乖離について、そのような思考モデルに擬せられる表現の関係性がみられるということを指摘しておきたい。

ふたたびそれは、何か。それは、被抑圧的で被差別的な扱いを受けている立場や階層にある人びとに共通してみられるのみならず、それは近代以前にも西欧的近代化を受け入れた明治以後にも、そしてさらに現代社会においても、人間の存在における不得要領として、普遍的に、不可抗力のうちに私たちが引き受けてしまっている感性・感受性をつくり出している人間のある種の限界性、つまり人としての「いのち」の有限性のことに関係している認識であるとともに無理解でもあるということなのではないだろうか。「私たちの悲劇の母胎とは、時間の力に抗することができないことに由来している。人間とは、血でつくられた時計だ」[47] とルイ・アラゴンが表現し、ダダイストの画家マルセル・デュシャンの墓碑銘には「さりながら死ぬのはいつも他人」という言葉が彫られているという、そのことについて、大岡信氏は「私たちは一人残らず生きている。生きているあいだは、『死ぬのはいつも他人』である。デュシャンの警句はその意味で千古不滅の真理をいかにもデュシャンらしい歯切れのいいイロニーで語っている。」「しかし、デュシャンがこの警句を自らの墓碑銘に刻ませたと聞けば、話はそれほど単純ではなくなる。『さりながら死ぬのはいつも他人』と言っている人物自身が、死んでそこに横たわっているのである。言いかえれば、死んでいる本人が、ここに死んでいるのは私ではない、死んでいるのは他人だ、と言っているのである。それなら、その『私』はどこにいるのか。デュシャンは相変わらず答える。『死ぬのはいつも他人』。」[48] と、このデュシャンのアフォリズムは、まさにパラドキシカルな反転させて述べられている「死」という現実について、その不可避であり、

不可知でもある〈死〉という主題（人生いかに死ぬべきか）が、〈生〉そのもの（人生いかに生きるべきか）において、すでに書き込まれプログラムされているという宿命性（死生観）として哲学的にも諧謔的にも現われているというアンビヴァレンツなあり様を語っていてきわめて興味深い。「死ぬのはいつも他人」であるけれども、「たった一度だけ自分」なのであり、そして何人も、自分自身の墓碑銘をみることはできない。デュシャンのアイロニカルな墓碑銘を読み、その警喩を多様性のうちに諒解する人は「いつも他人」であることに変わりはない。ある意味において、この警句を一瞬にして悟達したりあるいは諦観してしまう、つまり「言葉」としてではないかたちで看取してしまうような凄味が、こうした「小民」においては、あるいは「小民史」として物語や歴史として描き出されていくエクリチュールそのもののなかには、あらかじめ内属させられ起動させられているというひとつの特性がみられるもので、あたかも時限爆弾のように仕掛けられたもの、それこそが「死」に他ならない。周知のように、独歩の小説の多くは、「死」を描き出している作品ばかりであって、「死」が書かれないと小説が終われないことになっていると言っても過言ではないほどである。

さて、その作品名からしてそのままである「死」（『國民之友』明治31年6月10日）という短編小説は、冒頭から「死」が描かれていて、「死」をもって終わるのではなく、「死」によって始まるというものであった。独歩の小説「死」は、麹町三番町に住む小官吏富岡竹次郎の自殺から始まっている。そうしてその自殺の原因は、誰にも分からず不得要領のまま時間の経過として受け容れられる他ないはかないものなのである。富岡の自殺について、結局「突然の発狂といふ外に誰も終に源因を見出し得なかツた。」[49] と集約され、そこには「死」という「生」とは異なる厳然たる事実があるばかりなのであったが、作品の語り手である「自分」は、「知らず知らず一個の意味深き事實に衝突つた。」というように、「死」に対してひとつの普遍的な思想や観念ではなく、ある個別の「事実」を見出し得ることとなる。その「意味深き事實とは人は容易に『死』其者を直視することが出來ない、従つて其測り知られざる大不思議に打たれることが出来ない」「自分はただ斯く腦の幻影を追ふてゐて遂に『死』其者をみることが出來ない」というものであった。ここでいう「腦の幻影」とは、たとえば「微笑する富岡の幻影」であり、「鮮血に染んで室内に横たわる幻影」であり、「灰と白骨其者の幻影」であるわけだが、それらの「幻影」のなかで、「生命ある富岡の幻影の方が『死』其者より自分に取つては力があつた」という考えにたどり着き、そこから「普通人が親や子や朋友の死んだ當座は大變これに動かされるが時が立つと次第に薄らいで來るのは、つまり死者生前の幻影のみが長く腦底に残つてゐて其人を思ひだす毎に微笑して現はれて來るからだらう」という推測へといたる。そうしてそのように考える「自分」を「まるで一種の膜の中に閉じ込められてゐるやうに感じ」「天地凡てのものに對する自分の感覚が何だか一皮隔ててゐるやうに思はれて來てたまらなく」なってしまうのである。ここには、「『死』そのものを直視することが出來ない」という嘆きと同じように、「生」そのものについても「一種の膜の中に閉じ込められ」「一皮隔ててゐる」ように、その実体を直視できない嘆きに陥ってしまっている主人公「自分」がおり、それは真正に「死ぬこと」の経験が出来ないばかりでなく、真正に「生きること」も収奪されているということを指摘しているように思われる。あるいは逆転して、人間とは必ず死すべき「運命」にあるものであって、その「運命」は誰にも疑いなく訪れるものであるわけだが、その反面として、生きている間に本当に生きた人間にはなかなか出会うことがない、なぜならば、人間は生も死もどちらも理解できないからである。そこで、独歩は「生」の手がかり足がかりを得るためにも、「死」を描き続けるのである。人間にただ一度きりしか訪れな

い「死」を知悉することによって、やはりただ一回性の「生」を確かな経験とするために、可能なかぎり観念の陥穽に陥ることなく、あるほどの真実に近い本当の「死」を描き出そうと、その可否については別として、いくつもの作品のなかで「死」を探究したのではないだろうか。そこで、独歩の他の小説についても可能なかぎり検討してみる必要がある。芥川龍之介が前出の「文藝的な、餘りに文藝的な」のなかで、「僕等は皆ペエタアの言つたやうに確かに『いづれも皆執行猶予中の死刑囚である』。この執行猶予の間を何の為に使ふかは僕等自身の自由である。自由である？」[50] というペーターの言葉を引いて論じていたことはとても印象的な思考なのであるが、その直後の芥川の自殺を重ね合わせて考えるのなら、さらに暗合してしまうような点がみられるわけだが、独歩の小説で富岡竹次郎の自殺で始まる小説「死」を、独歩の「死」に満ち満ちた小説作品を耽読して、芥川は独歩について大事なことを述べていてきわめて重要である。

たとえば、川端康成の小説「浅草紅団」の不良少年少女への関心は、当時のモダニズムの風俗への関心であり、「小民」と同じように、社会の底辺で棲み暮らしている者たち、あるいは社会からドロップアウトして法律とは無関係に生きている者たちの姿を描いているわけだが、その捉え方は明らかに異なっている。独歩の「小民」は孤立しているが、川端の「不良」は連帯しているからである。

さて、そのように独歩の「小民」は、近代国民国家の要請する「国民」（＝臣民）とは異なる理解のアプローチに依拠しながら、大衆の原像を描き出そうとした継続的な営みであり、その営為は短編小説に限られてはいたが、まさに特筆に値する作品群であるとみられるわけで、たとえばその見方は自然主義の小説家たちからの評価のうちに読み取れるものであり、そうした先駆的な小説家としての位置づけは、日本語表現史上においては決して揺るぎのないものと思われる。しかし、その一方で立憲政治家星亨との関係や堂上政治家の西園寺公望との結びつきをどのようにみるのかという問題もあり、とりわけ政界進出の計画をどのように理解するのかという政治史的な課題が残されていて、それは一つ政治史にとどまらない文学の問題でもあるのではないだろうか。しかし、それは中江兆民の「一年有半」（博文館、明治34年10・11月）を読むのなら、いくらか明察できるようにも思われる。最晩年の兆民がもっとも期待もし評価もしていた二人の政治家が、この星亨と西園寺公望であったこと、それは藩閥政治に対する官僚国家体制に対する絶望的な嫌悪感や反感と表裏一体のものである。兆民の「余近代に於て非凡人を精選して、三十一人を得たり」[51] と述べるように、その深謀遠慮は明白である。独歩最後の小説「二老人」（『文章世界』、明治41年1月15日）に「放浪」の性癖が親から子へと流れていき、その運命を暗澹たるものとしてしまうということが書かれているが、それは近代人の宿命でもあって、「放浪・漂泊」とは近代主義の典型的な性格としてみることの出来るものなのである。

ところで、「放浪・漂泊」という性癖は、独歩にも近代人の宿命的なスティグマのように刻印されているようで、結婚と離婚を繰り返す生活のうちに、教師生活やジャーナリストの経験を積み重ねながら詩や小説を書き続け、また相応の政治的野心は星亨の暗殺により挫折することとなり、明治35年（1902）失業生活のため妻子を妻の実家に預けたまま、小説を書くための鎌倉生活（1902年2月から11月まで）を続けていたが、苦心して書き上げた「畫の悲しみ」「少年の悲哀」「鎌倉夫人」「酒中日記」「運命論者」などの小説は売れないまま東京へ戻ったのである。滝藤満義氏が日露戦争時のナショナリズムの昂揚期における独歩の活動について言及しているわけだが、[52] その伏線として独歩の雑誌編集者としての手腕が大きくその存在感を示す時機がめぐってくる。帰京した独歩は微妙な立

場ながら、矢野龍渓の招聘により近事画報社に入社することになる。その点について黒岩比佐子氏は、「独歩に大きなチャンスが到来する。矢野龍渓が新雑誌を発行することになり、その編集長に独歩を推挙したのである。おそらく独歩の窮状を見かねてのことだったのだろう。龍渓はその経緯について、ある人の依頼で近事画報社の設立から黒幕として相談を受けたので、編集担当者として独歩を推薦した、と述べている（『新小説』一九〇八年八月号）」[53] としている。また、「近事画報社」を「戦時画報社」と社名変更して経営を行い隆盛となるが、終戦とともに社運衰退により同社を解散して、明治39年6月「独歩社」を興すものの、翌40年4月に破産する。その間の経緯について、黒岩氏は「日清戦争に従軍した独歩は、自分が書いた記事への反響から、読者が戦争報道に何を求めているのか、どんな記事に感動するのかを理解していた。そして、近事画報社にとっては、日露戦争こそが、経営を軌道に乗せる千載一遇のチャンスとなった」と述べて、『近事画報』第六号（1904年2月発行）の「社告」に「近事画報社は日露交戦の際、特に臨時増刊を月に二回乃至三回、以上発行し、題して近事画報臨時増刊戦時画報と称す。」[54] としている事実を指摘して、マス・メディアを通じた「戦争報道」の国民に働きかける本質的な高揚感について意識的であったわけだが、むしろ「號外」（『新古文林』明治39年8月）のなかでは、そうした国民的共同性がカリカチュアライズされて描かれているように思われる。

こうして、新保邦寛氏の「小民」についての見解は、先行研究を網羅したうえで、さらに独歩の各作品における「小民」についての具体的な論を展開していて詳細を尽くしているわけだが、そこには従来からの論点に呼応している部分がかなり採られているように思われる。

四．独歩のナショナリズム

さて、ここまで独歩文学における「小民」の位相と内実について検討してきたわけだが、では、この「小民」という主題性と独歩におけるナショナリズムとの関わりについて考察してみることにする。そこで、たとえば新保邦寛氏の指摘しているように、この時期の独歩の小説は高山樗牛の「個人主義」の思想に著しく影響され、その受容のなされていることはおそらく間違いのないものであろう。新保氏は、「石川啄木の『時代閉塞の現状』（明43・8）に於ける次のような指摘、つまり日清戦争後に始まる青年たちの自己主張が、先ず〈高山樗牛の「個人主義」〉で〈第一声〉を見、次に〈綱島梁川らの「宗教的実験」〉を経て、やがて自然主義に到ったとする文脈に、独歩の例えば〈岡本もの〉が見事に対応して書かれている」と指摘し、さらに「『岡本の手帳』が梁川の『病閒録』（明38・9金尾文淵堂）に刺戟されて書かれたことは好く知られているが、『牛肉と馬鈴薯』も実は、樗牛の〈個人主義〉の影響をうけていることが、〈明35・4・8付薄田泣菫宛書簡〉で知れる。おそらく『画の悲み』執筆も樗牛への関心に端を発している。」[55] との見通しを示していて、独歩におけるナショナリズムの表出に関する重要な観点となっているわけだが、この点に関して前述の「社会進化論」の論点を組み合わせるのなら、池田功氏の論証するように「明治時代の社会進化論を考える上で、加藤弘之はその中心人物と考えられる」として、「自然界は常に『優者』が勝ち、『劣者』は敗れてゆく『優勝劣敗』、弱肉強食の世界である。これをそのまま『人間世界』に応用したものである。『この優勝劣敗説を肯定すれば、そのすぐうらには富国強兵政策が導き出されてくる」と勝本清一郎が指摘するように、官学派の考えでありナショナリズムと結びつく。」[56] として、進化論が当時の一大流行思想としてナショナリズムへと接続していることを前提として論をすすめていく。そうして啄木が「進化」

という言葉を用いた一連の思索の端緒は、高山樗牛の『近世美学』（明治32年）からそのまま引用したことを明らかにしている。その高山樗牛が「進化論」について言及した最初期の論文は「道徳の理想を論ず」（『帝国文学』明治28年6月－9月）であり、「『進化の自然法』、『自然淘汰の理法』、『進化の大法』などの言葉を使い、道徳が機械的に発達したことを説明している」[57] というものであった。しかし、こうした「社会進化論」に導かれた優勝劣敗の国家主義を基盤とした高山樗牛の思想は、樗牛自身の「適者生存」に合致する「強者」であり「優者」であるという個人主義の意識を背景としていることは疑いのないものであるわけだが、前述の新保氏の言うように独歩の小説における「小民」理解との整合性について、「『帰去来』や『小春』は、個我の問題が大きく浮上してくる中で生み出され」「こういう自己省察と個我の拡大を通過して」、前述したように「作者との紐帯をもった〈小民〉、むしろ作者がその〈心〉に溶け込んでしまっているような〈小民〉が生み出された」[58] と論じているところがきわめて重要になってくる。つまり、独歩の「小民」を通して看取されるものとは、日本人としての〈エートス〉とみてもかまわないある種の内的持続性の感じられるもの、要するに道徳的慣習や雰囲気と言ってもよい内面性そのものなのではないだろうか。最晩年の小説「窮死」や「竹の木戸」に描かれた人物についてみてみるなら、そのことが如実に表わされているように思われる。

こうして、独歩の小説に描かれている「小民」の位相においてナショナルな繋がりをみようとする場合、わずか10年ほどの独歩の小説のなかにおける「小民」観の変遷についてさらに検討を加えていく必要があると思われる。

註

（1）樋口一葉の凝集した創作状況について、松坂俊夫氏の言うように、「小島政二郎ふうに言えば『天才が神に魅入られて奇蹟を行った二年間』、この考えをさらに端的にした和田芳恵のいわゆる『奇蹟の十四箇月』」（松坂俊夫『鑑賞　日本現代文学　第2巻　樋口一葉』、角川書店、1982年8月31日、27頁）と呼ばれていることは周知の通りである。

（2）独歩小説における「語り」の構造については、たとえば滝藤満義氏が「独歩の小説には少数の座談の席で一人の男が物語るという形式が多いんです。」「一人の男、つまり語り手の、その物語を聞くのが直接的には座談の席に参加している人ということになるのですが、これは同時に実質的には読者一人ひとりが聞き手になるということにもなるわけです。つまり独歩の小説の文体には読者に向かって語りかけるという形式のものが非常に多いのが特徴だと思います。」（『国文学　解釈と鑑賞』至文堂、1991年2月、21頁。）と論じていて、近代文学の「文体」をめぐる重要な論点であるが、その点に関して書簡体の作品の多いことにもふれて、滝藤氏は「これは海軍従軍記者として彼が従軍した時にも弟に宛てた手紙という形でしか記事が書けなかったということを思い合わせれば、独歩が特定の読み手、聞き手というものを想定しないと文章が書けないタイプの人であったということがわかると思います。」と指摘している点は重要である。また、藤井貞和「物語に語り手がいなければならない理由」（『國語と國文學』東京大学国語国文学会、1998年8月号、1－17頁。）を参照。

（3）中村青史「独歩をめぐる政治家・作家たち」（『国文学　解釈と鑑賞』至文堂、1991年2月号、62頁。）

（4）平岡敏夫「国木田独歩論―文学的系譜にふれつつ―」（『国文学　解釈と鑑賞』至文堂、1991年2月号、29－32頁。）を参照。そのことは、文学を「男子一生の仕事」として選択したことと、たとえば政治的社会的な活動との対照として、いつまでも本人のなかで葛藤を強いるような思考状態・反応形

式として残るものなのではないかと考えられる。それは、独歩の生きた「明治」が未だ色濃く士族の「生き方」についての矜持を失わせていない時代であるということも見逃せない要件ではないだろうか。

（5）中村青史『民友社の文学』（三一書房、1995年12月15日、32－68頁。）を引用および参照。

（6）和田守「民友社の歴史的位相－その成立と展開－」（『民友社とその時代－思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡－』ミネルヴァ書房、2003年12月30日、3－18頁。）を引用および参照。また、西田毅「思想集団としての民友社」（同書、19－34頁。）、山田博光「文学集団としての民友社」（同書、35－50頁。）をも併せて参照した。

（7）註（6）和田守「民友社の歴史的位相－その成立と展開－」に同じ、4頁。

（8）「雨声会」は、西園寺公望の私的なサークルとして、当時の文学者との懇談会を行ったもので、その席に、国木田独歩も招かれている。また星亨と独歩の関係についても、独歩の政治的な行動とその挫折とを通してみるのなら、重要な問題を提示していると思われる。

（9）高野純子「国木田独歩略年譜」（『国文学　解釈と鑑賞』至文堂、1991年2月号）によると、明治21年（1888）3月に民友社の『青年思海』に「群書ニ渉レ」を寄稿したこと。明治24年（1891）1月に青年文学会の席上で、水谷真熊の紹介で徳富蘇峰に面識を得ることの記事が出てくる。そして、同年2月に在学していた東京専門学校改革のストライキに参加して、翌3月に退学。5月には山口県熊毛郡麻郷村に帰省とある。ところで、先の「青年文学会」とは、『青年文学』（前身は『青年文学雑誌』）を発刊している研究会のことで、それについて中村青史氏は「『青年文学雑誌』第1号（一八九一・3・6）の『本会紀事』によると、まず青年文学会が設立され、その発企人会が一八九〇年一〇月五日に開かれた。二一人集まりその中に国木田哲夫もいた。互選により委員が選ばれたが、その中には独歩の名は見えない。第一回例会は一〇月一九日で、毎月一回例会をもち、“諸大家ヲ聘シテ文学ニ関スル講話ヲ聴クコト”」と述べていて、続けて「独歩の『明治二十四年日記』によれば、“水谷氏と共に青年文学会の席場を探しに行く”（一月一五日）というのがあり、これは前年の一二月中に開かれる予定だった第三回例会が延びていたものであった。同日記の一月一八日（日曜）の項によると、“午前六時半星を戴て出づ、外神田大時計前福田屋に開く青年文学会に出席す。蓋し委員の任に在るを以て衆に先ちて至りしなり。”とあるが、独歩はいつの間にか委員になっていたようだ。とにかく同宿者で会計主任の重責にあった水谷真熊とともに会の世話役をやっている。そしてこの第三回例会こそは、彼と徳富蘇峰の初対面ということになるのだった。」（「第四節　国木田独歩―民友社の揺り籠の中で―」『民友社の文学』（三一書房、1995年12月15日、175－193頁を引用および参照。）と書いていることから、独歩と蘇峰との邂逅は、明治24年1月18日ということになる。

（10）「日本型国民国家」とは、牧原憲夫氏による西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』（新曜社、1995年3月）の書評に分かりやすくまとめられているように、普遍的な「国民国家」であるための問題点と「日本型」という問題点として大きく二つのテーマに分けて解説がなされている。（牧原憲夫「書評　西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』」『日本史研究』第404号、1996年4月20日、120－127頁。）を参照。

（11）西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（至文堂、1961年刊行、206頁。植田康夫「総合雑誌の盛衰と編集者の活動」『岩波講座　「帝国」日本の学知』第4巻に所収、146頁。）

（12）松浦総三『松浦総三の仕事三　ジャーナリストとマスコミ』（大月書店、1985年刊行、221頁。植田康夫「総合雑誌の盛衰と編集者の活動」『岩波講座　「帝国」日本の学知』第4巻に所収、146頁。）

（13）植田康夫「総合雑誌の盛衰と編集者の活動」（『岩波講座　「帝国」日本の学知　メディアのなかの「帝国」』第4巻、2006年6月24日、146頁。）また、佐々木隆氏は「蘇峰は『世の中の政治を吾が思ふ

様に動かし導かん事」『世の中を予の是なりと思ふ方に導かんとする志』を懐いていたが、大臣にも議員にも官僚にもなる気はなかった。当時の主要政治勢力（藩閥・官僚・政党）のいずれでもない蘇峰の基盤はマス・メディアにあり、それによって得られた声望である。言論でじかに政治情況を動かすことは不可能ではないが（一般に望まれる新聞人像だ）、有力者に働きかけることで現実を動かすことは右の信条と矛盾するまい。政官界と新聞界にはもともと重なりがあるが、蘇峰の棲息域はまさにそこではないのか。有力政治家が派閥や地盤を抱えているのと同様に、蘇峰は発言力・影響力の源泉としてメディアを擁しているのではないか。」（「徳富蘇峰と権力政治家－帝国日本興隆へのアプローチ」『岩波講座 「帝国」日本の学知 メディアのなかの「帝国」』第4巻、岩波書店、66－67頁を引用および参照。）と述べている。

(14) 註（11）植田康夫前掲論文に同じ、147頁。

(15) 山内昌之「ネーションとは何か－日本と欧米の非対称性」（『岩波講座 現代社会学 第24巻 民族・国家・エスニシティ』岩波書店、1996年9月25日、13－14頁。）

(16) ハーバート・スペンサーの「社会進化論」とは、あらゆる事象を単純なものから複雑なものへの進化・発展のプロセスとして通時的に把握し、生物・政治・経済・社会・心理・道徳の多元的な現象を統一的に解明しようとした学説であり、明治前半期の日本に大きな影響を与え、当時の青年知識階層をとらえた重要な思想の一つであった。たとえば石川啄木における「社会進化論」の影響について、池田功「社会進化論の影響（一）－高山樗牛を通して」「社会進化論の影響（二）－『相互競争』から『相互扶助』へ」（『石川啄木 その散文と思想』世界思想社、2008年3月31日）の論考が示唆的である。そのなかで池田氏は「国家が保守に傾き、進歩することを止め老人のイメージになったら、『適者生存』、『優勝劣敗』という理法により、列強諸国に敗れ滅んでゆく。それ故に進歩に足手まといとなる、『劣者弱者』を切り捨てよという進化論からくる国家認識は、国家を人種で考え自国をエリート人種とみなし、劣等とみなす人種を切り捨てるという考えとなる。この考えこそ、初期の啄木が社会進化論の影響から学んだナショナリズムのマイナス面である。そして残念なことに、啄木の初期のナショナリズムは、この優者としての視点から発想されていた。」（前掲書、176頁）とある。また、中山和子氏は「啄木は日露戦争を『正義の為、文明の為、平和の為、終局の理想の為』の戦争だと考えていた。けれども日本の文明がロシアに勝ったのではなく、ただ日本の兵隊がロシアに勝ったに過ぎない、と痛切に考えていた」「ロシアは真の文明を代表すべき天才を所有しているという意味で、日本にはるかに優位するということになる。戦争に勝った国の文明が、敗けた国の文明に敗けていはしないか、という焦慮が天才主義者啄木の当時の愛国的情熱なのであった」「この頃の啄木のナショナリズムは、民族の血族的な共同意識が、国家の実体と融化し、エリート意識と結んでできあがった、一種の国家主義的ナショナリズムとでもいえようか。明治専制国家の体制が根本的に疑われることはまったくなかった」（「啄木のナショナリズム」『文芸研究』1979年3月、『中山和子コレクションⅡ 差異の近代 透谷・啄木・プロレタリア文学』翰林書房、2004年6月30日、244－282頁を引用および参照。）と指摘されていることはきわめて重要であり、同時代の青年知識階層の広範囲に該当する見方と考えられる。

(17) 註（10）に同じ。

(18) 滝藤満義氏は「小民愛から言いますと、独歩が『欺かざるの記』の中で小民史を主張したということもあり、戦後ひところ独歩が小民に非常に愛情を持って彼らとの連帯感を作品に描いているのだと言って高く評価するむきもありました。しかしこれはちょっと疑問に思います。」（『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、1991年2月、23頁。）と述べて、独歩の「小民愛」、小民への〈まなざし〉に対する評価の時代的変遷のあることを指摘しながら、「小民」の内実として「他の吾」に言及して、「独歩の言

う「他の吾」というのは自分が共感・共鳴できる、当時の彼の言葉で言えば「同情」できる他者の一部であり、他者そのものを受け入れることではない」「その意味で「他の吾」というのはあくまでも吾の一部であり、吾の拡大したものに過ぎない」とみなしているような評価に集約されている。

(19) 芥川龍之介「文藝的な、餘りに文藝的な」(『芥川龍之介全集』第9巻、岩波書店、1978年4月24日)初出は、雑誌『改造』誌上に4回にわたって発表され、第1回(1～20)が昭和2年4月、第2回(21～28)が同2年5月、第3回(29～33)が同2年6月、第4回(34～40)が同2年8月の発表となっている。また、『文藝春秋』(昭和2年4月および7月)に「続文藝的な、餘りに文藝的な」(1～10)がある。

(20)「小説の筋」論争とは、芥川と谷崎潤一郎との間に応酬されたものであるが、その前段階としては、大正13年頃から始まった私小説論議・心境小説論争が先行していた。谷崎は、昭和2年2月から12月までの『改造』誌上および『大調和』(昭和2年10月号、原題は「東洋趣味漫談」)に「饒舌録」と題した文芸随想を連載して、その第1回目から自己の小説観について次のように公表した。「いつたい私は近頃悪い癖がついて、自分が創作するにしても他人のものを讀むにしても、うそのことでないと面白くない。事實をそのまゝ材料にしたものや、さうでなくでも寫實的なものは、書く氣にもならないし讀む氣にもならない。」「かう云ふと何か、小説はうその話に限る、無いことを有るやうにでつち上げたものでなければならぬ、と、そんな主義でも抱いてゐるやうに取られさうだが、決してさう云ふ次第ではない。事實小説でもいゝものはいゝに違ひないが、たゞ近年の私の趣味が、素直なものよりもヒネクレたもの、無邪氣なものよりも有邪氣なもの、出來るだけ細工のかゝつた入り組んだものを好くやうになつた。」(「饒舌録」『谷崎潤一郎全集』第20巻、中央公論社、1982年12月25日、72－73頁。)のように表明したのである。そうして、第2回には芥川の「新潮合評会」(『新潮』昭和2年2月号)における谷崎批評への応答として「近頃の私の傾向として小説は成るべく細工の入り組んだもの、神巧鬼工を弄したものでなければ面白くないと、前號で私が書いたのに對し、ちやうどそれと反對のことを芥川君が云つてゐるので、それに興味を感じたからである。芥川君の説に依ると、私は何か奇抜な筋と云ふことに囚はれ過ぎる、變てこなもの、奇想天外的なもの、大向うをアツと云はせるやうなものばかりを書きたがる。それがよくない。小説はさう云ふものではない。筋の面白さに藝術的價値はない。と、大體そんな趣旨かと思ふ。しかし私は不幸にして意見を異にするものである。筋の面白さは、云ひ換へれば物の組み立て方、構造の面白さ、建築的の美しさである。此れに藝術的價値がないとは云へない。(材料と組み立てとはまた自ら別問題だが、)勿論此ればかりが唯一の價値ではないけれども、凡そ文學に於いて構造的美観を最も多量に持ち得るものは小説であると私は信じる。筋の面白さを除外するのは、小説と云ふ形式が持つ特権を捨てゝしまふのである。さうして日本の小説に最も欠けてゐるところは、此の構成する力、いろいろ入り組んだ話の筋を幾何學的に組み立てる才能、に在ると思ふ。」(『谷崎潤一郎全集』第20巻、76－77頁。)と真っ向から反論したことに端を発している。

(21) 註(19)に同じ、48頁。

(22) 註(19)に同じ、48頁。

(23) 註(19)に同じ、8－9頁。

(24) 臼井吉見「心境小説論争」(『近代文学論争　上』筑摩書房、1975年10月20日、190－204頁。)を引用および参照。

(25) 国木田独歩「欺かざるの記」(『定本国木田独歩全集』第6巻、学習研究社、1995年7月3日、71頁。)

(26)「波野英学塾」は、北野昭彦氏によると「吉田松陰の崇拝者であった当時の独歩が、『余も亦彼の最

大たる事業ともいふべき、松下村塾の如きを起して、郷党を集め、所謂精神教育を施」そうとして、明治二十四年、山口県田布施に開塾したのが波野英学塾で、休日には『皆を連れて山登りをした。そして帰つて来ると文章を書かせ』るなど、体験的知育を重んじ、あらゆる機会を教育の場に活用する松陰の方法を継承している。この教育法は、後年、佐伯の鶴谷学館でも実践され、その理念は後の小説『日の出』（明36・1）に投影されている。」（北野前掲論文「独歩と事業・教育」、66頁。）という。

(27) 国木田独歩「田家文学とは何ぞ」（『青年文学』1892年11月15日、『定本国木田独歩全集』第1巻、学習研究社、209－214頁。）

(28) 北野昭彦「独歩と事業・教育」（『国文学　解釈と鑑賞』至文堂、1991年2月、67頁。）に、「自由党の新聞事業に携わろうと決断した。が、入社直後、自由党も既に理想と情熱を失っていると知るや、『自由』社での彼の仕事はもはや『理想の事業』でなく、『パンの為め』の余儀なき労働と化した。」とある。

(29) 北野昭彦前掲論文および渡部芳紀氏の「佐伯は詩のある町である。それは、国木田独歩の『春の鳥』『源おぢ』の舞台だからである。独歩は〈二十一、二歳まで東京で煩悶を行つて居ましたが、それも出来なくなりまして、遂に矢野龍渓先生の推薦で、先生の郷里、佐伯で英語の教師をやつて一年許り居ました〉「我は如何にして小説家となりしか」独歩二十三歳の頃である。旧藩主毛利家の後押しで設立された鶴谷学館で英語と数学を教えた。〈今日までの生涯に於て最も幸福なりし時〉「独語」だった。〈此閑静なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拝者となり、ヲーズヲース信者となり、明けても暮れても渓流、山岳、村落、漁村を遍めぐり歩き、渓を横切る雲に想を馳せ、森に響く小鳥の声に心を奪はれ〉「我は……なりしか」て過ごしたという。」（「国木田独歩文学散歩」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂、1991年2月、165－167頁を参照。）という自然に密着した生活を送っていたのである。

(30) 註（25）に同じ、70頁。

(31) 註（25）に同じ、70頁。

(32) 註（25）に同じ、69頁。

(33) 国木田独歩「忘れえぬ人々」（国木田独歩「忘れえぬ人々」、『国民之友』明治31年4月、『現代日本文学全集　国木田独歩集』筑摩書房、22～25頁。『定本国木田独歩全集』第2巻、学習研究社、105－121頁。）

(34) 註（33）に同じ、120頁。

(35) 下條信輔『意識とは何だろうか　脳の来歴、知覚の錯誤』（講談社現代新書、1998年2月20日、199頁）および下條信輔『サブリミナル・インパクト　―情動と潜在認知の現代』（ちくま新書757、2008年12月10日）を引用および参照。

(36) 柄谷行人「風景の発見」（『日本近代文学の起源』講談社、1980年8月21日、21－36頁。）を引用および参照。

(37) 小林秀雄「故郷を失つた文学」（『新訂小林秀雄全集第三巻　私小説論』新潮社、1978年7月25日、31－32頁。）

(38) 註（37）に同じ、33－37頁を引用および参照。

(39)「【鼎談】吉本隆明・小森陽一・石原千秋　一郎的な言葉を生きること」（『漱石研究』第15号、翰林書房、2002年10月20日、6－7頁。）

(40) 註（18）に同じ、23－25頁を引用および参照。

(41) 山田博光「独歩と民友社」（『文学』岩波書店、1965年1月）

(42) 新保邦寛「〈小民史〉の行方・〈社会〉への眼差　―独歩文学を貫くもの―」（『國學院雑誌』第92巻

第１号、國學院大學、1991年１月15日、461－481頁。）および新保邦寛「二人の〈私〉・もう一つの〈小民史〉―独歩文学を貫くもの（２）―」（『筑波大学研究紀要』1992年）を参照。

(43) 註（５）に同じ、175－179頁を引用および参照。

(44) 柳田国男の「常民」については、「山の人生」（『定本柳田國男集第４巻』筑摩書房、1963年４月25日、57－186頁）を参照。

(45) 独歩の母の国木田まさ子は、その自伝「嗚呼國木田獨歩　父母の膝下における獨歩」（『中央公論』第二十三年第八号、明治四十一年八月一日、『定本國木田獨歩全集』第10巻、301－303頁）で独歩における父専八の影響力の強さについて言及している。

(46) 国木田独歩『獨歩病牀録』（『定本国木田独歩全集』第９巻、学習研究社、44頁。）

(47) ルイ・アラゴンのエッセイに依拠している。

(48) マルセル・デュシャンについては、大岡信氏の「一九六八年に亡くなった画家マルセル・デュシャンの墓碑銘には、『さりながら死ぬのはいつも他人』という言葉が彫られているそうである。」（大岡信『永訣かくのごとくに候』弘文堂、５－７頁を引用および参照。）というエッセイに依拠している。また、同書には「国木田独歩の涙」というエッセイが入っていて、独歩の死生観を伝えるすぐれた文章になっている。

(49) 国木田独歩「死」（『國民之友』明治31年６月10日、『定本国木田独歩全集』第２巻、139－155頁。）

(50) 註（19）に同じ、71頁。

(51) 中江兆民「一年有半」（『近代社會文學集』角川書店、1973年４月20日、90－91頁。）

(52) 註（18）に同じ、23－25頁を参照。

(53) 黒岩比佐子『編集者国木田独歩の時代』（角川学芸出版、2007年12月10日、52－136頁）を引用および参照。

(54) 註（53）に同じ、52－53頁。

(55) 註（42）に同じ、468頁。

(56) 池田功『石川啄木　その散文と思想』（世界思想社、2008年３月31日、162－163頁。）

(57) 註（56）に同じ、168頁。

(58) 註（42）に同じ、469頁。また、後藤康二「国木田独歩論－『小民』から『我』の問題へ」（『国文学解釈と鑑賞』至文堂、1991年２月号、40－49頁）を参照。

A study on KUNIKIDA DOPPO — "the lower" as a way of novels

OHTUBO Toshihiko

KUNIKIDA DOPPO has a plenty of short novels which wrote about the theme of "the lower" as long as his lives.

I studied on this essay about those short stories, made reference to his diary as "*Azamukazaru no ki*" and his several experiments, for example, a school teacher, a journalist, an editor, and so on.

DOPPO and his works were influenced by the official nationalism, therefore I also investigated them on the point of view about "NATION STATE".